

接続詞「でも」の会話分析研究 — 悩みの語りに対する理解・共感の提示において —

安 井 永 子

1. はじめに

「でも」は、「逆接」の接続詞であると定義され、後続する文が、先行する文と相反する関係であることを示すものであると理解されている。しかし、実際の会話において使われる「でも」の中には、接続の機能が薄れ、「逆接」と解釈し難いものも少なくない。例えば、「でも、わかる」のように、先行発話に対する理解を示す前に「でも」を使う場合がある。実際の会話からの以下の抜粋では、先行する発話内容が「でも」で受けられたのにも関わらず、それに対する反論ではなく、理解の提示が次に続いている（トランスクリプト内の記号については、注を参照）。

(1) [Japanese Friends Talk, Turtleneck 2]

1 Y: もうあきらめた[って言って
2 M: [いやー
3→H: でもね 気持ちわかる

ここはYが自分の経験について語り終わった場面であるが、HがYの語りの内容に対して、「気持ちはわかる」と理解を明言する直前に「でも」が用いられている。この「でも」の照応先は明確でなく、その用法を逆接と定義するのは適切ではないように思われる。本稿で取り扱うのは、このように、理解や共感の提示の前に用いられる接続詞「でも」である。

書かれた文章や一人の話し手による独話とは違い、会話の中で用いられる接続詞には、接続機能だけでなく、談話標識 (Discourse marker) としての様々な機能があることが論じられている (Maynard, 1989; Mazeland & Huiskes, 2001; Schiffrin, 1987)。陳 (2008) は、「でも」は「対比談話標識」として機能しているとし、先行発話と対立的関係にある内容を予告する機能、話題移行を示す機能、情報の補足を示す機能の三種類に分類している。加藤 (2001) は、「でも」や「しかし」など、逆接とされる接続詞は、取り除いても発話の流れが成り立つ場合もあり、必ずしも接続機能を持つものばかりではないことを指摘している。談話内では、「でも」や「しかし」は多くの場合、前述の内容を受け入れた後、その前提であった解釈に修正を加えたり、新規の情報を追加したりする前に用いられることによって、前件と後件の「対比・対立」の関係を示すこと

ができる」と論じている。

これらの先行研究では、談話においては「でも」が接続以外の機能を持つことが多いことが示され、その用法を解明するには、統語論的に文の内部要素を分析するだけでなく、陳述内容にも着目しなければならないことが指摘されている。しかしながら、語用論的分析を行っている加藤(2001)では、作られた架空の文内での「でも」の使用を分析対象としており、会話での話し手と聞き手の「対話」における使用を取り扱っていない点で、独話の分析の域を出ない。実際の会話を分析対象としている陳(2008)でも、「でも」の前後の発話内容の関係性からその用法や意味の解明を行っているに過ぎず、会話というより大きな枠組みの中での「でも」の使用を明らかにしたとは言えない。会話における「でも」の機能を解明するには、それがどのような活動の中で、会話の参与者たちによってどのように用いられ理解されているかに着目せねばならず、進行中の会話における「でも」の産出過程に焦点を当てる必要があると考えられる。

本稿では、実際の自然会話を分析対象とし、「でも」が会話において用いられる「過程」に焦点を当て、それがどのような「行為」を遂行しているのかを解明する。特に、会話中には頻繁に観察される、先行発話への『理解や共感の提示』の前に用いられる「でも」(「でも」+『理解・共感の提示』)について検討する。前述の内容に対する直接的な反論ではなく、先行発話を支持する内容が後に続く場合に「でも」の使用が可能になるのは、会話のどのような状況においてあるのか。本稿の目的は、話し手と聞き手の相互行為を微細に分析する「会話分析 (conversation analysis)」の手法を用いて、それを解明することである。進行中の会話において、参与者が「リアルタイムに」行為の連鎖を構築していくその過程に焦点を当てる会話分析を用いることで、接続詞「でも」が、特定の活動の中でどのような行為を遂行するかを明らかにすることを目指す。

2. データ

分析に使われたデータは、以下に示す三種類の、友人同士の実際の日常会話をビデオカメラにより収録したものである。いずれも、参加者の中の一人の自宅で収録が行われ、参加者たちは一つのテーブルを囲んで座り、特に指示のないまま自由に会話に従事している。

- ① 4名の女性による合計約3時間の会話。
- ② 5名の女性による合計約3時間の会話。
- ③ 6名の女性による約1時間の会話。

本データの中で、<「でも」+『理解・共感』>が頻繁に観察されたのは、特に、誰かの一種の悩みや懸念が述べられる活動においてであった。一般に、他者の悩みや問題の語りに対して選好的であると考えられる応答 (Preferred response) (Pomerantz, 1984) の一つは、共感や理解

を示すタイプのものであると考えられる。本来は逆接や対比や話題の転換を示す接続詞「でも」が、そのように相手の立場に歩み寄る姿勢 (affiliation) を見せる行為の前に使われる理由の背景には、一つの規則性があることが観察された。以下、本データからの抜粋を元に、その規則性と、「でも」が「悩み語り」という特定の活動の中でどのような行為を達成するのかの解明を試みた。

3. 悩み語りにおけるく「でも」＋『理解・共感』>

3.1 「でも」＋『類似経験』

Sacks (1992) は、話し手が経験を語った後、それと類似した経験を語る「第2の語り」を行うことによって、聞き手は話し手の語りを自分が理解したことを単に「主張」するのではなく、「立証」することができるかと論じている。串田 (2001、2006) は、自分の経験を語った相手に対して、別の話し手が自らの類似した経験を次に語ることで、最初の話し手と次の話し手が「共一成員 (Co-member)」つまり同じカテゴリーに属する成員であることが浮かび上がると論じている。同様に、悩みが語られた場面においても、聞き手が類似した悩みを語ることで、先行する話し手と「同じような悩みを分かち合うことができる仲間」であることが立証され、話し手と聞き手との間の「共一成員性 (Co-membership)」が可視化される (戸江 2007)。「共一成員性」を示すことで、話し手の悩みが特異なものではなく、誰でも経験し得るものであることが表明できると考えられる。本節では、聞き手が話し手の悩み語りを「でも」で受けた後、自分、或いは他者の類似の悩みを語ることで、共一成員の存在を提示し、話し手の悩みへの理解を立証するケースを検討する。

以下の事例2は、話し手が聞き手の全員からは自分の悩みに対する理解・共感を得られていない中で、聞き手の一人が理解を示すケースである。以下の抜粋では、ヒサコ (H) が、タートルネックのセーターが似合わないことが悩みであることを述べた後、ユミコ (Y) が友人にも同様の悩みがあることを示すエピソードを語っている。ここで着目したいのは、ヒサコの悩みを特異なものとして反応し、理解を示さない聞き手がいる中で、ユミコがヒサコへの理解を示す、そのやり方である。以下の会話は、ヒサコが、自分の首があと1センチでいいから長くなってほしいと述べる場面から開始する。

(2) [Japanese Friends Talk, Turtleneck 1]

- 1 H: 1センチでいいのよ:
 2 S: .hhh[h [↑なんで[全然そんなの必要ない[よ
 3 E: [うんうん[うん [°そんなことない° [う:ん
 4 H: [でもね自分では[わかるの
 5 私はあと1センチ伸び(.)[てたい
 6 M: [なんてな(h) ん[(h) で(h)

(3)

- 7 S: [え↑なん[でなんで=
 8 E: [そうそうそう
 9 ヒサ[コさんぜんぜ：ん
 10 H: [え なんか (.) タートルネックとかが似合わないの
 11 (0.3)
 12 E: ↑え：：そ[- いや：：
 13 S: [え：：
 14 H: うんう[ん
 15 R: [°え そうなんでし[ようか°
 16 M: [そっかな[:
 17 H: [そ：う
 18 S: [↑ま：↓え着てたの見たことあるけど
 19 ぜんぜんz- 似合ってたよ[: タートルネックう：ん[.hh
 20 H: [そ：お? [でも
 21 自分で[は (Eを見る))
 22 S: [考えたことも[な[かったけども
 23 E: [あ[: : ああ[おもってしまう=
 24 Y: [自分ではそう[感じる .
 25 H: [自分でね
 26 S: =え (hh) く (h) び (h) が (h) くびが[伸びたいとか考えたことな (h) い .hhh
 27 H: [自分のことってさ 気になるじゃない (Eに))
 28 M: ((MはYを見た後、首をかしげる))
 29 H: 人までさ=
 30 E: =う[: ん
 31 H: [そうなのよ そうなのよ . ((Eを見ている))
 32 E: h[hh
 32→Y: [でも 私のももだちも :=
 33 H: =う[ん
 34 Y: [なんかタートルネック似合わないからって
 35 タートルネック ぜんぶ 私にくれたことあ[る .
 36 E: [hahahaha
 37 H: [あ ほんと[↓
 38 M: [うそ：：

ここでまず、ヒサコの悩みに対する聞き手の反応を見てみよう。首の長さを気にする理由を聞かれ(6、7行目)、ヒサコが10行目で「タートルネックとかが似合わないの」と答えたのに対し、エリ(E)は「え：：、そ、いや：：」(12行目)、サヤ(S)は「え：：」(13行目)、リョウコ(R)は「え、そうなんでしょうか」(15行目)、マキ(M)は「そっかな」(16行目)と、それぞれ不同意を表わしている。つまり、ユミコ以外の聞き手が全員、ヒサコがタートルネックが似合わないとは思わない、との態度を明示している。自分の身体的特徴における問題について述べた個人に対し、同意を示すのは選好的な応答(Pomerantz, 1984)ではなく、特に反応を見せないユミコ以外は、「不同意」という選好的応答に志向していることがわかる。次に、同意しない理由として、サヤが、「まえ着てたの見たことあるけど、ぜんぜん似合ってたよ」(18、19行目)と

述べると、ヒサコは「でも自分では」と言ってエリに視線を向け（20、21行目）、同意を求める。つまり、ヒサコは、自分の首の長さの問題に直接言及するのを止め、「自分では自分の身体部位について気にしてしまう」という、別の意見を提示することで、他者からの同意を得ようとしている。ここでヒサコの視線を受けたエリは、「ああ、思ってしまう」（23行目）と、ヒサコの主張に理解を示し、ヒサコの視線を受けていないユミコも、「自分ではそう感じる」（24行目）と理解を示す。二人の聞き手の理解の提示を受け、ヒサコは、「自分のことってさ 気になるじゃない」（27行目）と、聞き手との意見の一致を確認しようとするが、その発話に重複して、サヤ（26行目）は、首の長さについて悩むことを奇異であると捉えている態度を示し（「首が伸びたいとか考えたことない」）、マキは首をかき上げて理解を示さない（28行目）。つまり、ここでは聞き手の態度が二手に分かれている。「他人は気にしないような些細な身体的特徴でも、自分では気にする」というヒサコの意見に、エリとユミコが理解を示す一方で、サヤとマキは、「ヒサコが首の長さを気にすることが理解できない」という態度を表明している。

このように、ヒサコが聞き手全員からは理解を得られていない状況にある中、ユミコが語り始める。ユミコは、「でも私のともだちも」（32行目）から始めて、自分の友達がヒサコのようにタートルネックが似合わないことを気にしていたことを示すエピソードを語る。つまりユミコは、ヒサコの悩みに対する理解の表明をすると同時に、類似した経験を語ることで、ヒサコの悩みが特異なものではないということを「立証」しようとしている。ここで、「私のともだち『も』』」と言うことで、ヒサコの悩みに直接関連した内容をこれから話すということを暗示するのにも関わらず、そのターン冒頭に「でも」という逆接の接続詞を用いて直前の行為を受けているのはどうしてであろうか。ここで「でも」が用いられる経緯を探るには、その前の文脈を再度検討する必要があるだろう。自分はタートルネックが似合わないヒサコが述べたとき、聞き手の中でそれに対する不同意を表明しなかったのはユミコだけであることと、他人が気にも留めないような自分の身体的特徴に、自分だけは気にしてしまう、というヒサコの意見にユミコが理解を示していることは、ユミコがここで「でも」と発することと無関係ではないように思われる。つまりユミコは、「でも」をここで用いることで、ヒサコの悩みを特異なものとして理解を示さないサヤとマキの立場と自分の立場との「対比・対立」を表明していると考えられる。それにより、ヒサコの悩みを理解しない聞き手がいる中で、ヒサコへの理解を示すことのできる自分の立場と他の聞き手との立場の違いを「でも」が予告しているといえる。類似経験について語るができるという点で、ヒサコの立場に歩み寄ることのできる唯一の存在である自分の立場を強調することは、ヒサコへの理解の表明を、より強い形にしていると言えるだろう。

以上のように、事例2は、話し手に対して理解を示さない参加者がいる中で、話し手への理解を示す前に「でも」が使われるケースであった。ここでの「でも」は、悩みの語り手に対してより強い理解を示すための手段として用いられていることが観察できた。次に、聞き手の見解が一致している（全員が悩みの語り手に対して理解を示している）際に、<「でも」+『理解・共

感』>が現われるケースを検討する。

3.2 「でも」 + 「わかる」

本データ中、「わかる」という、明示的な理解の表明が「でも」の後に続く場面が繰り返し観察された。平本（2011）は、語りに対して「わかる」と明示的に理解を示す形で返答することで、他者が語った経験を理解したということを示すだけでなく、その経験に対する見解や態度も理解していることをも示すことができると論じている。本節では、何らかの悩みが話題になる場面において、<「でも」 + 「わかる」>がどのような形で、相手への理解や共感を示すことができるのかを分析する。

まず、事例3を見てみよう。ここでは、参加者の一人の将来に対する懸念に対し、他の参加者全員が理解を示す中、そのうちの一人が「でも、わかる」と言っている。以下の抜粋は、ヒサコの息子が数ヶ月後に大学進学で家を離れるため、ヒサコが寂しくなるということが話題になる中、類似した状況におかれた母親がかかる病気についてテレビで知ったということ、リカ（R）が話している場面である。

(3) [Japanese tea time 2, Karanosu]

- 1 R: 大学生の息子が[: 巣立った後に[: 奥さんが .hh
 2 H: [うん [う[ん
 3 M: [うん
 4 R: あの：誰もいないうち(.)になれてなくっ[て[:
 5 H: [う[: : ん
 6 T: [そうだよね
 7 R: で なんかこう病気になっちゃうっていうのが .hh >°なんだっけ<
 8 空の巣しょうこ(hh) うぐ(h) ん(h) とかいう[(.) [びょうきがあるらしく[って:
 9 H: [↓あ: [: :
 10 T: [↓°う: [んうん°
 11 M: [°からのす°
 12 Y: [あ: ↑:
 13 (0.2)
 14 M: あ 空[の巣
 15→T: [でも わかる := ((R以外の他の聞き手全員に視線を向けて))
 16 H: =[わかる: ((Yもうなずく))
 17 R: =[わからなくもな[いな と思って: [うん
 18 M: [うんう: ん
 19 H: [私もさ 人事じゃないのよ 来年だから

この事例で分析の焦点となるのは、ヒサコのように大学生の子供が家を離れることで母親が陥る可能性のある「空の巣症候群」についてリカが述べた後のトオコ（T）の発話、「でも、わかる」

(15行目)である。リカが8行目で「空の巣症候群」という病名を出した際、ヒサコ(9行目)とユミコ(12行目)は「知識状態の変化を示すトークン(Change-of-state token)」(Heritage, 1984)である「あ:」を用いて、新情報を耳にしたことを示し、マキは「からのす」と小声で繰り返すことで(11行目)、それが自分にとって聞きなれない言葉であることを示している。それに対し、トオコは、リカが「空の巣症候群」と言った後、小声で「う:ん、うん」(10行目)とうなずき、納得した素振りを見せる。そしてその後、リカから他の参与者たちの方に視線を動かし、「でも、わかる」と言っている。ここで、「でも」がターン冒頭に付く理由は何であろうか。この「でも」の照応先を探るには、この直前にリカが笑いを含みながら「空の巣症候群」と発していることに着目する必要があるだろう。Jefferson, Sacks, and Schegloff (1977)は、笑いを含みながら発話をするのは、聞き手の笑いを引き出そうとしている行為であると論じているが、ここでのリカの笑いは、空の巣症候群という、鳥に例えたネーミングをユニークで可笑しいものとして差し出していることを示すだけでなく、同様の反応を聞き手から引き出そうとしている行動に見える。つまり、リカは、自立した子供が家を離れた寂しさから病気にまで発展するという深刻なケースについての話題に対してではなく、病名のユニークさに対しての反応を聞き手に求める形で発話を終えているのである。

ここで、この特定の連鎖内の位置において接続詞「でも」が選ばれた理由として、「でも」が、個人の懸念や問題が進行中の話題となっていることとどう関わっているかに関連して検討したい。そもそも、ここでトオコがリカの話単なる新情報の受け入れとして扱うのではなく、「わかる」と反応すべきものとして扱ったのはどういう訳か。それは、リカが空の巣症候群の話題を持ち出した背景が、息子が大学進学のために一人暮らしを始めるということについてヒサコが話し始めたことである、ということと関係がある。寂しくなるという懸念を表わしたヒサコに対し、類似した状況にある母親が陥りうる深刻な病気についてリカが紹介したという経緯を考慮すると、空の巣症候群は、ヒサコには無関係なことではなく、ヒサコにも起こりうる事態として聞き手には受け止められている可能性がある。すなわち、ここでトオコは、「わかる」と反応することで、子供が家にいなくなった寂しさから空の巣症候群になる母親に対して理解を示すと同時に、息子が家を出た後の寂しさを懸念していたヒサコに対する共感も表わしていると考えられる。では、共感・理解を表わす「わかる」の前に用いられた「でも」は、理解・共感を示すという行為の中でどのような機能を持っているのだろうか。先に述べた通り、ここでリカは、「空の巣症候群」という単語を笑いながら発音することで、それがユニークなネーミングであるということに志向した反応を聞き手から求めているように思われる。そのリカの発話を「でも」で受けることで、ユニークな名前を持つ病気にも関わらず、自分は理解できるものである、つまり、病名のユニークさに関わらず、病気そのものは特異ではない、という「対比」が示されているのではないだろうか。「でも」は、リカが笑いを含めることで表示した話題へのスタンスに対して、対比的な立場を表示するための装置として機能しているのである。子供が家を離れることにより感じる

寂しさが病気にまでも発展しようという深刻なケースを、「特異なことではない」「私でもその気持ちがある」と主張することを通して、結果的に、ヒサコが抱いている、息子が家を離れる寂しさへの懸念への共感を表わすことが可能になっていると考えられる。

このように、事例3でも、接続詞「でも」によって、話題となっている悩みや懸念の特異性の否定が示されることが観察できた。次に、「でも、わかる」と発せられた後、それに続いて前の話し手の悩みと類似の悩みが語られる場面を検討してみよう。平本(2011)が論じているように、他者の語りに対して「わかる」と言って理解を「主張」するだけでは、理解の提示としては弱い。その後、自らの類似の悩みを語って、同じ悩みを「分かち合う」状態を作り出すことで、より強い理解・共感の提示が可能となると考えられる。以下の事例4では、最初の話し手に対し、第二の話し手が共感を示し、類似の悩みを語ったのに続いて、第三の話し手が同様に共感を表わす際、<「でも」+「わかる」>を用いた後に自らの類似の悩みを語ることで、共感の表明をより強いものとしている。

事例4は、北米で収録されたデータからの抜粋である。以下の抜粋の前、まずリョウコ(R)による悩み語りが行われる。リョウコは、アメリカに長年住んでいるのにも関わらず、アメリカ人とどのように英語で会話を始めたらいいか未だにわからないという悩みを打ち明ける。それに対し、マキが共感を示した後、リョウコの悩みに関連した自分の悩みについて語る。マキは、アメリカで生まれ育った日系2世であるが、英語を母語とする自分ですら、英語でうまくジョークが言えず悩むことがある、と告白する。英語に関してはエキスパートであるはずの自分でも似た悩みを抱くと話すことで、リョウコの悩みが特別なものではないということを示し、そんな自分でも同様の悩みを分かち合うことのできる仲間であると立証することで、マキはリョウコへの共感の提示を強めている。

しかし、ここで注意すべきは、マキが同時に、自分の悩みをも露呈することで、ともすれば英語のネイティブスピーカーである自分の面目を潰しかねない事態に、自分を追い込んでいるという可能性である。つまり、マキ自身の悩み語りに対して、聞き手が何等かの処置をするのが必要な状況を招いてしまったといえる。こうした中、悩みを打ち明けた二人の参加者に対し、以下に示すようにユミコが「ああ、でもわかるなあ」と言ってターンを取り、さらに自分の類似の悩みを語っている。

(4) [Japanese Dinner 3, Jokes and Culture]

- 1 R: そう[そうそ: うんうんうん
 2 M: [ばかにされるだろうとか思っちゃったりするんだよね.=
 3 R: =おもうおも[う
 4 M: [私もそう思うよ.
 5 R: う:[んう:ん
 6 Y: [.hh あ.hhh °でも:° ((上半身を少し後方に動かしながら))

- 7 わかるな：それ 私まだちょっとしかいないけど[： ((目をこすりながら))
 8 M: [う[ん
 9 R: [うん
 10 E: [うん
 11 Y: やっぱりこう：.hhなんか (0.5) ライティングのクラスとかで[：
 12 R: [うん
 13 Y: ちょっとコミカルな文章とか書かせ[られたとき[とかでも：
 14 M: [うん
 15 E: [う：ん
 16 Y: .h[hhなんか自分ではおもしろいと思ってもシーンとか
 17 E: [あ：
 18 Y: な(h)[って(h)た(h)りとか：すごい傷つく
 19 R: [hah hah hah hah

上記の抜粋からわかる通り、ユミコが「でも、わかるな：それ」(6、7行目)と述べるのは、リョウコとマキの悩みの分かち合いの連鎖が終結に向かっている段階である。マキが、リョウコの悩みと類似した自らの悩みを語り終え(2行目)、それにリョウコが「思う思う」(3行目)と同意した後、マキが再び「私もそう思うよ」(4行目)と言ってリョウコの同意を確認すると、リョウコも「うんうん」(5行目)とそれに答えている。こうして、リョウコとマキが似た問題を分かち合うことでこの連鎖の終結の手続きに入っているのにも関わらず、次にユミコは上半身を後方に少し動かしながら「あ」と言って息を吸い、「でも、わかるな：それ」(6、7行目)と、先行する話し手に対する理解を明示するのである。そしてその後、アメリカに来てまだ間もない自分にも似た様な経験と悩みへのアクセスがあることを語ることで、「わかる」と自分が理解と共感を明言できる理由を示している。つまり、ユミコは、終息に向かっていた話題をここで再開することをしている。接続詞である「でも」には、当然その前後を接続する働きがあるが、それが逆接を示すという性質上、先行発話からの何らかの分離(disjunction)を意味することが聞き手に認識される。ここではつまり、リョウコとマキによってなされていた連鎖の完結の手続きとは「分離」した何か別の行為が続くことが予告されていると考えられる。その後、「わかる」と言って先行する悩み語りへの反応を示すによって、終息しかかっていた話題に対しての言及を始めることが、聞き手には理解されることになるのである。

ここで、ユミコが「でも、わかるな：」と述べるときの身体行動には、一つ気になる点がある。他者への理解を示す発言をしているのにも関わらず、ユミコが下を見て目をこすりながら、「わかる『な：』」と、独り言のように述べるという点である。ユミコが「わかるよ」と言って理解を相手に直接主張するのではなく、自分の心情を述べただけ、というやり方で理解を独話的に明言するのはなぜだろうか。この点に関連して、悩み語りという特定の活動の中で、逆接の接続詞「でも」が個人の悩みへの反応としてどのような機能を持っているかを、更に詳しく検討したい。

その前に、先行する2人の話し手とユミコとは在米経験に違いがあることを理解しておく必要

があるだろう。リョウコは在米歴10年、マキはアメリカ生まれであるのに対し、ユミコの在米歴はまだ浅く、2ヶ月程度である。つまり、本来ならユミコは、リョウコとマキと同じ立場で、二人の悩みを理解するということはできないはずであり、ユミコの「わかる」は、マキがリョウコに対して示した理解とは同等のものであるはずがない。この点に一つ、ユミコが「わかるよ」ではなく、視線を外して目をこすりながら「わかるな：」と独話調で理解の主張をした理由があると考えられる。本来「わかる」と言えない立場にある中で「わかる」と述べるためには、相手に直接言う形ではなく、独話調で言うほかなかったのである。これは、経験値が異なるという事実と、それでも理解することができるかと述べることとの間の、ある種の「対立」関係に、ユミコ自身が気づいていることを示すことにもなっている。つまり、その「対立」が「でも」の使用によって示されているのだ。事実、ユミコはその直後、「私まだちょっとしかいないけど」(7行目)と、自分の経験値が他の二人とは異なると認識していることを示してもいる。そして、在米歴が浅い自分でも、「アメリカに長く住んでいるのにも関わらず、英語で会話する際に問題を感じる」というリョウコとマキの共通の悩みに対して理解・共感ができることを立証するため、自分のアクセスできる範囲において類似した問題を語り、自分の「わかる」という理解の明言への裏付けを行っているのである。事例2や3では、他の参加者の取ったスタンスに対比する形で自分のスタンスを出す場合に「でも」が用いられていたが、ここでは「ユミコが『わかる』とは言えない立場にある」というスタンスを他の参加者が取っているわけではないため、「でも」は他の参加者との対比ではなく自分の中での想定との対比であると理解できる。

更にもう一つ、リョウコとマキが悩みを打ち明けたという文脈にも、ユミコが直接的に「わかるよ」と述べることを避けた理由、及び、「でも」が用いられた経緯が隠されていると考えられる。ユミコは、類似した悩みとして自分の作文の可笑しさをライティングのクラスで理解してもらえないという問題について語る中で、最後に笑いを含ませ(18行目)、聞き手からの笑いを誘っている。ユミコは自分の問題を、「笑うべきもの」、「深刻ではないもの」として差し出しているのである。Jefferson(1988)は、問題の語りからの離脱の手段(Troubles-talk exit device)の一つとして、冗談などで問題を軽く見せることがあると論じている。つまり、マキがリョウコの悩み語りに参加して、悩み語りの連鎖を拡張させたのに対し、ユミコは、悩み語りに参加する姿勢を見せながらも、会話の焦点の方向性をそこから逸らすことに志向していることがわかる。

ユミコが悩み語りからの離脱に志向していることは、即ち、リョウコとマキの「きまりの悪さ」へ配慮していることを意味すると考えられる。悩みを語り、自分の弱さを露呈した二人は、在米歴が長いにも関わらず、未だにアメリカ人との会話に関して問題を抱えているという事実に対し、ある程度のきまりの悪さを感じている可能性がある。少なくとも、ユミコが「でも、わかるな：それ」と述べる際に、目をこすすることで二人を見ることを避けていることから、ユミコが二人に対して気まずさのようなものを感じている可能性が感じられる。ここでユミコが「でも」を用いて、前の行為を受けることは、前の行為によって生じた想定を次に否定するということの予告

であると考えられる。つまり、他者のきまりの悪さを想定する場において「でも」を用いることによって、ユミコは、リョウコとマキが自らの悩みを特異なものだと感じている可能性を否定することを予告し、自分が二人への理解を示すための準備をしていると言える。このように、ここで使用された「でも」は、様々なレベルの要素に志向した機能を持つことが可能となっているのである。

以上のように、事例4では、悩み語りの聞き手が、会話の進行と、語られた悩みへの配慮との両方に注意を傾けていることが明らかになった。特にこの事例では、本来であれば悩みの語り手と同等の経験を持っていないはずの聞き手が、その悩みを「わかる」ことをどのように示し、悩み語りからの離脱へと会話を進めているかが観察できた。理解を明言する前に「でも」を用いることで、悩み語りによって生じる様々な相互行為上の問題を取り扱うことが可能となっているのである。

4. おわりに

本稿の目的は、接続詞「でも」の、会話における一つの機能を解明することであった。特に、何らかの悩みや問題が語られる文脈において、「でも」の後に、話し手への理解や共感を示す行為が続く場面を分析した。本データでそのような「でも」が観察されたのは、語られた悩みや問題が一般に理解・共感できないと思われるようなものである場合や、話し手とは共通の経験を持たない立場にある聞き手が、話し手の悩み語りに対して理解・共感を示す場合においてであった。つまり、悩みを聞いた後、聞き手が容易に「そう、わかる」と言い、そのまますぐに理解・共感を示すことが不自然に感じられるような文脈において、「でも」の使用が可能となっていたのである。

Jefferson (1988) は、悩みや問題を語る活動において、聞き手は、会話進行の管理と、語られる問題そのものへの取り扱いとの両方へと常に注意を向けることが求められると論じている。本稿では、「でも」が悩み語りにおいて理解・共感を効果的に示す上で重要な役割を担っていることが明らかになった。悩み語りの聞き手が「でも」を使用することにより、話題となっている悩みや問題の語り手の想定が次に否定されることが予告される。「でも」は、悩みや問題を語った参与者に対しての理解・共感をより強めるため、その悩みや問題が特異なものであるという「想定や認識」を否定し、それらを特異とする立場と、普通のものであると主張する自らの立場との対比・対立を可視化するものなのである。つまり、「でも」は先行発話に直接の対比を示すものではなく、先行する発話や行為の中での想定への対比を前もって示す働きをされると考えられる。悩みや問題の語りというのは、単なる経験についての語りを行う場合には無い、一種の危うさを含んでいる。なぜなら、自分の悩みや問題を語ることによって、その語り手は、自らの弱点をさらけ出し、自らの「面目を潰す」危険性があるからである。共感・理解を示す前の「でも」は、

悩みの語り手のそのような危うさへの配慮に志向する中でこそ用いられているトークンであるといえよう。

本データの分析を通し、悩み語りにおける一つの規範が浮かび上がった。それは、悩みが語られた際、語られた悩みや問題が異常・特異なものではなく、誰でも感じる「普通のこと」であるということを示すことが適切な返答だと認識されるということである。もちろん、ここで取り上げたのはいずれも軽い悩み事の語りの場面であり、悩みの種類によっては、異常性を強調する形で返答する方が好まれる場合もあるかもしれない。しかし、少なくとも今回取り上げたケースでは、聞き手が、自分や自分の知っている他者にも同様の悩みや問題があることを示しており、聞き手が悩みの語り手との「共一成員性 (Co-membership)」を可視化させ、「そのような悩みを抱くことは異常なことではなく普通のことだ」ということを立証することに志向しているように見えた。語り手への「共一成員性」を主張することは、語り手への共感・理解を強調できるだけでなく、自分の弱点を露呈したことで語り手が多少感じる可能性のある「ばつの悪さ」「恥ずかしさ」の度合いを軽減することができると考えられる。「でも」により、語られた悩みや問題が特異なものであるという認識を否定するのは、そのために必要な手続きなのである。

本稿では、ある言語トークンの、会話における機能を解明するためには、そのトークンがどのような活動の中で、どの位置で用いられ、どのような行為を遂行しているか、つまり、話し手がそのトークンによって、進行中の活動にどのように参与を遂げているか、ということに焦点を当てる必要があることが示された。つまり、そのトークンが用いられる前後の発話の関係性のみだけでなく、そのトークンの使用が可能となる文脈が構成されていく過程に着目することで、会話という大きな枠組みの中でのその位置付けを探ることができるのである。本稿はしかし、接続詞「でも」が、悩み語りという一つの活動において、語り手への理解・共感を示す前に用いられる場合のみを扱ったに過ぎない。今後、更に様々な活動と文脈における「でも」の使用にも目を向けることで、この接続詞の会話上の「文法」をより明確にすることを目指したい。

(注)

会話データの文字化にあたっては、JeffersonによるCAのトランスクリプション規則に従った。使用した記号の意味は以下の通りである。

- : 直前の音の引き延ばしとその長さ
- (数字) 沈黙の長さ
- .hh 吸気音とその長さ
- hh 呼気音とその長さ
- (h) 笑い声
- [発話の重なるの開始

-] 発話の重なりの修了
- = 繋がれた二つの発話が隙間なくつながっている
- . 語尾の下降
- °文字° 相対的に小さい声での発話
- 文字 相対的に大きい声での発話
- 直前の音が中断されている
- >文字< 相対的に速く発されている
- ((文字)) 身体動作の描写

参考文献

- 陳相州 (2008) 「日本語会話データに見られる対比談話標識の使用実態」『言語と文化』9, 237-252.
- 加藤重広 (2001) 「照応現象としてみた逆接: 『しかし』の用法を中心に」『富山大学人文学部紀要』34, 47-78.
- 串田秀也 (2001) 「私は一私は連鎖: 経験の『分かち合い』と共一成員性の可視化」『社会学評論』52(2), 36-54.
- 串田秀也 (2006) 『相互行為秩序と会話分析: 『話し手』と『共一成員性』をめぐる参加の組織化』世界思想社.
- Heritage, J. (1984). A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson and J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press. P. 299-345.
- 平本毅 (2011) 「他者を『わかる』やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62(2), 153-171.
- Jefferson, G. (1988). On the sequential organization of troubles talk in ordinary conversation. *Social Problems*, 35(4), 418-442.
- Jefferson, G., Sacks, H., & Schegloff, E. A. (1977). Preliminary notes on the sequential organization of laughter. *Pragmatics Microfiche*. Cambridge: Cambridge University.
- Mazeland, H. & Huiskes, M. (2001). Dutch 'but' as a sequential conjunction: Its use as a resumption marker. In: M. Selting & E. Couper-Kuhlen (Eds.), *Studies in interactional linguistics* (pp.142-169). Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Maynard, S. K. (1989). *Japanese Conversation: Self-Contextualization through Structure and Interactional Management*. Norwood, NJ: Ablex Publishing.
- Sacks, H. (1992). *Lectures on Conversation, Vol. 2*. Oxford: Blackwell.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis, Vol. 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schiffrin, D. (1987). *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 戸江哲理 (2007) 「悩みの分かち合いの会話分析: 『手抜き』の提案とその受け流し」『ソシオロジ』51(3), 39-55.

AbstractConversational Functions of Japanese Connective “*Demo*” in the Responses to Trouble Talk

This study examines the conversational usages of Japanese contrastive connective “demo (but)” in conversation. Drawing on conversation analysis (CA), a micro-analytic approach to talk-in-interaction, I aim to explore how “demo” functions when it is used in a specific action during a specific activity; namely, in a response to the telling of one’s trouble. Specifically, I focus on the cases in which “demo” is placed before understanding or empathy towards the teller of the trouble is expressed. While “demo (but)” is syntactically categorized as a contrastive connective, its function to connect two sentential elements is not fully kept when it is used before the indication of an alignment with a previous speaker, such as understanding or empathy. The analysis revealed that “demo,” when used during the telling of a trouble, manages the progressivity of conversation as well as the sensitivity of the talk that telling of a trouble causes. This study demonstrates the importance of examining the use of connectives in relation to the actions it achieves as well as the ongoing activity in which it is used.